



サモア語、タヒチ語、ハワイ語における不定名詞句 の現れ方について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2018-05-15 キーワード (Ja): ハワイ語, タヒチ語, サモア語, 不定冠詞, 対照研究 キーワード (En): 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009616

サモア語、タヒチ語、ハワイ語における不定名詞句の 現れ方について*

塩谷 亨

Occurrence of Indefinite Noun Phrases in Samoan, Tahitian, and Hawaiian

Toru SHIONOYA

要旨：ポリネシア諸語に属するサモア語の *se*、タヒチ語の *e*、ハワイ語の *he* は従来不定冠詞と分析されてきたが、不定冠詞というだけでは説明できない機能を持っていること、また、不定冠詞の使用が予想されるところで定冠詞が多用されることが、指摘されてきた。本稿では、「A は B（という属性を持つグループの一員）である」という意味を表すコピュラ文、存在文、所有文、及び「~のような」という比喩を表す慣用表現において、不定冠詞がどのように現れるか、三言語間で比較対照を行った。さらに、不定冠詞の現れ方の違いについて、元々 *syntagmatic* な関係にあった二つの語の機能の統合、及び、元々 *paradigmatic* な関係にあった二つの語の機能の統合として、説明を試みた。

キーワード：ハワイ語 タヒチ語 サモア語 不定冠詞 対照研究

1. はじめに

サモア語、タヒチ語、ハワイ語は起源を同じくする同系言語グループであるポリネシア諸語に属し、お互いに文法的及び語彙的に類似している。その類似性のため、19世紀には、ポリネシア諸方言と称され、一つの言語の諸方言であるとみなされていたが、現在では、30弱の言語に分類されている。また、三言語の中でも、タヒチ語とハワイ語は同じ東部ポリネシア諸語という下位グループに属しており、より近い関係にある。これらの三言語は基本語順（述語が文頭）や前置詞による名詞の機能表示、時制や相の指標が動詞の前に付加される等、文法の重要な原則が共通であり、単語も同系のものが多いことから、逆に、文法上異なる振る舞いがある場合には違いが目立ちやすく対照がしやすい。本研究も、対照により差異が際立った点について扱うものである。

分析データについては、近年ネイティブスピーカーの減少から話し言葉データを入手するのが困難なハワイ語に合わせるため専ら文字データを用いる。これらの三言語は、いずれも、

ローマンアルファベットを利用した文字システムが 19 世紀に考案され、それ以降、聖書、法律、学校教材、小説、伝統文化の記録等の各種出版物、更には新聞の発行もなされ、文字言語が確立した言語であり豊富な文字言語データの蓄積がある。ジャンルとしては、伝統習慣、伝承伝説、歴史、ニュース、法律、物語、解説などできるだけ多様なデータを利用した。以下、それぞれの例文には出典（ページ数含む）を示す。

2. 文の基本的構造と本稿の目的

2.1. 名詞述語文と動詞述語文

これらの言語においては、一つの文は、述語となる名詞句又は動詞句、主語名詞句、及びその他の名詞句から構成される。基本的な語順は、＜述語名詞句/述語動詞句—主語名詞句—その他の名詞句＞である。このうち述語句は必須要素であるが、主語名詞句、その他の名詞句は表れない場合もある。例文(1)は名詞句が述語となる文の、例文(2)は動詞句が述語となる文の例である。以下、三つの言語の例文を対照する場合にはサモア語、タヒチ語、ハワイ語の順で提示することとし、それぞれ、サモア語の例文の前には(S)、タヒチ語の例文の前には(T)、ハワイ語の例文の前には(H)と表示する。

(1) <述語名詞句「ジョンだ」> <主語名詞句「彼の名前は」>

(S) ‘O Ioane lona igoa.¹

(T) ‘O Ioane tōna i‘oa.

(H) ‘O Ioane kona inoa.

～だ ジョン 彼の 名前

「彼の名前はジョンだ。」

(2) <述語動詞句「行った」> <主語名詞句「彼/女は」> <その他の名詞句「家に」>

(S) ‘Ua alu ‘o ia i le fale.

(T) ‘Ua haere ‘ōna i te fare

(H) Ua hele ‘o ia i ka hale.

～した 行く 彼/彼女 ～に <定> 家

「彼/彼女は家に行った。」

例文(1)の‘o は名詞述語を形成する前置詞であり、後ろに名詞句を従えて、名詞述語を形成する。尚、これらの言語では、述語名詞句は必ず何らかの前置詞を伴い＜前置詞＋名詞句＞のような構造になるのが大原則である。その原則の例外となる事例について第 3 章で述べる。例文(2)では「行く」という意味を表す動詞の前に完了を表す指標‘ua～ua が付加されて動詞述語を形成している。

2.2. 本稿の目的

これらの言語にはいずれも名詞の前に付加される冠詞が存在する。サモア語については単

数の冠詞として不定冠詞 *se* と定冠詞 *le* がある。その二つの冠詞に対応する形式として、かつては、タヒチ語については、Davies (1851)のように、不定冠詞 *e* と定冠詞 *te* を持つと分析され、ハワイ語についても、Elbert and Pukui (1979)のように、不定冠詞 *he* と定冠詞 *ka/ke*² を持つと分析されていた。しかしながら、タヒチ語とハワイ語の最近の分析では、不定冠詞の機能が冠詞としてだけでは説明しきれないこと (Carter 1996 等)、それから、不定冠詞の使用が予想されるところで実際には定冠詞が多用されること (Académie tahitienne 1986 等) がしばしば指摘されている。

本稿では、サモア語、タヒチ語、ハワイ語について、コピュラ文、存在文、所有文、及び比喩表現「~のような」において、意味的に<不定>の事物を表している名詞句がどのように現れるか、比較対照を行う。そして、三つの言語の比較対象に基づき、不定冠詞の用いられ方の違いについて、それらの違いは複数の機能が一つの形式に統合された結果であるとして、説明を試みる。

すでに述べたように、最近の分析では、厳密には不定冠詞とは呼ばれない場合もあるが、分析の便宜上、以下の分析では、従来不定冠詞として呼ばれていた、サモア語の *se*、タヒチ語の *e*、ハワイ語の *he* をそのまま不定冠詞と呼び、サモア語の定冠詞 *le*、タヒチ語の定冠詞 *te*、ハワイ語の定冠詞 *ka/ke* と区別することとする。

3. 分析

3.1. A は B である (A は B という属性を持つグループの一つ) である

コピュラ構文の一つで、「A は B (という属性を持つグループの一つ) である」という意味を表す文において、述語の中核となる名詞に不定冠詞が付加される場合がある。(3)は平叙文を(4)は疑問文をそれぞれ比較したものである。以下、分析上注目すべき部分を下線で表す。

(3) (S) 'O le teine 'o Ruta.

~だ <定> 女の子 <固有名詞> R.

「Ruta は女の子です。」Larkin (1966:5)

(T) E pa'ati na'ina'i roa 'o Tini.

<不定> ブダイの一種 小さい とても <固有名詞> T.

「Tini はとても小さいパアティ (魚ブダイの一種) です。」Cuneo (2010:13)

(H) He ali'i ko makuakane no Hawai'i ...

<不定> 貴族 あなたの 父 ~の ハワイ

「あなたの父はハワイの貴族です。」Nakuina (1902:20)

(4) (S) 'O se pusi lale?

~だ <不定> 猫 あれ

「あれは猫ですか。」Hunkin (2009:20)

(T) E manu ānei terā?

<不定> 鳥 <疑問> あれ

「あれは鳥ですか。」 Lazard and Peltzer (2000:111)

(H) He akua mana nō anei ‘o Laka?

<不定> 神 有力な <強調> <疑問> <固有名詞> L.

「Laka は有力な神ですか。」 Pukui & Green (1995:114)

上記の例文(3)-(4)において、サモア語においては名詞述語を導く前置詞‘o が用いられているが、タヒチ語とハワイ語ではそれがない。サモア語については基本的な述語名詞句の構造<前置詞+名詞句>の通りである。例文(1)でも示したように、名詞述語は何らかの前置詞に導かれるのがこれらの言語における大原則である³。尚、例文(1)は同定を意味するコピュラ文、例文(3)や(4)は属性を表すコピュラ文であり、同じコピュラ文だが、それぞれ機能が異なっている。機能が異なる様々な名詞述語文がある中で、属性を表す機能を持つタヒチ語やハワイ語のコピュラ文は、名詞述語文がいきなり不定冠詞で始まるという点で例外的である⁴。

また、サモア語については、平叙文において名詞には不定冠詞ではなく定冠詞 *le* が付加されているという点でほかの二言語と異なっている。このサモア語の例文は、Ruta という女の子を初めて物語に導入する場面の例であり、これより前に一切 Ruta についての言及も情報もなく、*le teine* 「女の子」という名詞句は明らかに、意味的には<不定>の名詞句と考えられる。このように、「A は B (という属性を持つグループの一つ) である」という意味を表す平叙文においてはサモア語では意味的に<不定>の名詞句である場合でも、定冠詞で代用する傾向がある。しかしながら、サモア語においても、主語名詞句が省略される場合、および、主語をトピックとして文頭に移動する場合においては、不定冠詞を用いることがある。

(5)(S) ‘O se ta‘avale.

<述語> <不定> 車

「(それは) 車です。」 Hunkin (2009:20)

(6)(S) ‘O ia ‘o se teine lālelei.

<トピック> 彼女 <述語> <不定> 女の子 美しい

「彼女は美しい女の子です。」 Steubel and Herman (1987:17)

上記の例 (5) は主語名詞句が省略されたもの、(6)は主語名詞句の‘o ia がトピックとして文頭に移動されたものであるが、それぞれ、述語名詞句では不定冠詞 *se* が用いられている。

3.2. A は B でない (A は B という属性を持つグループの一つでない)

上記 3.1.の否定表現である。三つの言語において、それぞれ若干異なる表現が用いられる。

(7)(S) E lē ‘o se fa‘amasino le Failautusi,...

<一般⁵> <否定> ～だ <不定> 裁判官 <定> 長官

「長官は裁判官ではない。」 FPSSC (2007:119)

(T) E‘ere ‘oe i te aito.

<否定> あなた <場所> <定> 戦士

「あなたは戦士ではない。」 Saura et Millaud (2001:58)

(H) ‘A‘ole kēia he pua ‘ē;...

<否定>これ <不定> 矢 風変りな

「これは風変りな矢ではない。」

Fornander (1916-1917:37)

上記(7)(S)のサモア語の例では、<時制マーカーe+否定辞 lē>が述語名詞句の前に付加されて、述語名詞句‘o se fa‘amasino「裁判官だ」が否定されている。タヒチ語とハワイ語においては、いずれも否定辞 e‘ere と‘a‘ole が文頭に現れ、<否定辞+主語名詞句+その他の要素>という構造になっている。これは、タヒチ語とハワイ語の典型的な否定文の構造であり、否定辞が動詞的に用いられ、否定辞それ自身が述語に相当すると考えられる。ハワイ語では、<その他の要素>として、3.1. 節で示した肯定の「A は B である」において述語名詞句を形成していた<不定冠詞 he+名詞>という構造、ここでは he pua ‘ē「風変りな矢である」が続いている。一方、タヒチ語では<その他の要素>として、場所の前置詞 i「~において」に導かれる名詞句、ここでは i te aito「戦士において」が来ている。タヒチ語の例文を文字通りに訳すと、おおよそ「戦士においては、あなたはそうではない」のようになる。このような表現はサモア語やハワイ語では見られない。

更に、タヒチ語においては、属性を表す名詞に不定冠詞ではなく定冠詞がついているという点で他と異なっている。Académie tahitienne (1986:18)によれば、タヒチ語の定冠詞 te には総称的な用法があるとされている。例(7)(T)のタヒチ語の例に見られる定冠詞 te についても総称的な用法（「~というもの」）と考えれば、「戦士というものについては、あなたはそうではない」のような意味と考えることができる。

3.3. A がある（存在文）

<不定>のものが存在するという意味を表す存在文である。いずれの言語でも、存在の意味を表す動詞によって表される。

(8)(S) E iai le fale.

<一般> ある <不定> 家

「家がある。」 (Hunkin 2000:98)

(T) Te vai nei te ‘aito i te pae ‘au e te vai ato‘a

<現在> ある <近称> <定> 戦士 ~に <定> 側 左 そして <現在> ある もまた

nei i te pae ‘atau o teie fenua.

<近称> ~に <定> 側 右の ~の この 土地

「この土地の左側に戦士がいて、右側にもいる。」Manu-Tahi (2005:111)

(H) Mai kāpae i ke a'o a ka makua, aia he ola malaila.

<禁止> 無視する ~を <定> 教え~の <定> 親 ある<不定> 生活そこに

「親の教えを無視してはいけません、そこに生活があります。」Pukui (1983:224)

このように、存在を表す動詞がそれぞれ述語動詞を形成し、その後ろに主語名詞句が続いており、基本的な動詞述語文の構造<動詞述語+名詞主語名詞句>となっている。ハワイ語では、主語名詞句に不定冠詞 *he* が付加されるのに対し、サモア語とタヒチ語ではそれぞれ定冠詞 *le*、*te* が付加される⁶。

サモア語の例文(8)(S)は平叙文である。3.1.節と同様に、サモア語では、存在を表す文についても、平叙文では不定冠詞の代わりに定冠詞が代用される傾向がある。疑問文や仮定を表す文等では、サモア語においても不定冠詞が用いられる。次の例文(9)と(10)はそれぞれ、疑問文、仮定の文の例である。

(9)(S) E iai se falaoa?

<一般> ある <不定> パン

「パンはありますか。」Hunkin (2009:96)

(10)(S) ...pe afai e iai se toto Hawaii.

もし <一般> ある <不定> 血 ハワイの

「もし、ハワイ人の血があるなら」FPSSC (2007:97)

3.4. A が一つもない

上記 3.3.の否定で、「一つもない」という意味を表す否定の存在文である。三つの言語において、不定冠詞か不定冠詞要素を含む語が用いられる。

(11) (S) E leai se mea lelei,...

<一般> ない <不定> もの 良い

「いいものは一つもない」Krämer (1994:154)

(T) 'Aita e mata'i.

<否定> <不定> 風

「風は一つもない」Perez (2004:70)

(H) 'A'ohe kanaka noho, 'a'ohe wahine, 'a'ohe keiki.

<否定+不定> 人 とどまる<否定+不定> 女性 <否定+不定> 子供

「とどまっている人は一人もいない、女性も一人もいない、子供も一人もいない。」

Fornander (1916-1917:471)

上記例文(11)(S)において、サモア語では動詞 *leai*「ない」が用いられ、<不定>の名詞句 *se mea*

lelei「よいもの」が主語名詞句として表れており、基本的な動詞述語文の構造＜動詞述語＋名詞主語＞となっている。タヒチ語では、否定辞‘aita が＜不定冠詞＋名詞＞の前に置かれている。また、ハワイ語では例文(7)(H)でも登場した否定辞‘a‘ole と不定冠詞 he が融合したと考えられる‘a‘ohe の後ろに名詞が続いている。従って、タヒチ語もハワイ語も、＜否定辞＋不定冠詞＋名詞＞という共通の構造として分析できる。また、三つの言語とも、不定冠詞を用いている点で共通である。

3.5. A が B を持っている。(所有文)

「A が B を持っている」という所有の表現では、サモア語では、例文(8)(S)でも登場した存在の動詞 iai を用いるのに対し、タヒチ語とハワイ語では「A は B である」という表現で用いられる例文(3)(T)と(3)(H)と類似した構造を用いる。

(12)(S) ...e iai lana `autanononofo e to`alua.

<一般>ある 彼の (複数婚システムによる)妻集団 <一般> 二人

「彼は(複数婚システムによる)二人の妻の集団を持っている」 Moyle (1981:164)

(T) E reo teitei to oe.

<不定> 声 高い ~の あなた

「あなたは高い声を持っている。」 Perez (2004:33)

(H) Ae, he oiaio he keiki ka'u.

はい <不定> 真実 <不定> 子供 私の

「はい、(それは) 真実です、私は子供がいます。」 Fornander (1916-1917:551)

上記例文(12)(S)では、文字通りに訳すと「彼の(複数婚システムによる)妻集団二人が存在する」という意味であり、構造としては基本的な動詞述語文と同様＜動詞述語＋主語名詞＞である。所有形 lana「彼の」の l-は定冠詞 le 由来のものであり、文法的には<定>の名詞句となっているが、単に「妻が二人いる」という事実を述べているのみであり、意味的には<不定>の名詞句に相当する。一方、タヒチ語とハワイ語ではそれぞれ、「あなたのは高い声です」、「私のは子供です」のような意味の表現で所有を表しており、＜不定冠詞＋名詞＋所有形＞のような構造となっている。

また、例文(12)(S)は平叙文であったが、3.1.節、3.3 節と同じように、疑問文の場合には定冠詞ではなく不定冠詞要素が用いられる。

(13)(S) E iai sona gutu?

<一般> ある 彼の/彼女の 口

「彼/彼女は口を持っているのですか。」 Tavita and Fetui (2012:73)

例文(13)(S)で、所有形 sona「彼の/彼女の」の s-は不定冠詞 se 由来であり、全体として、形式的には<不定>の名詞句となっている。

3.6. A のように。(比喩)

「A のように」という意味の比喩を表す慣用表現において、不定冠詞が用いられる場合がある。

(14)(S) ‘O isi sala e nonoa vae ma lima pei ‘o se puaa

<トピック> 他の 罰 <一般> 縛る 足 ～と 手 ～ように <不定> 豚

「他の罰は、手と足を豚のように縛って…」 Stuebel and Herman (1987:93)

(T) ‘ua ‘oto mai te anau tamari‘i ra.

<完了> 泣く～のように <定> 嘆き 子供 <遠称>

「(鳥たちが)子供の嘆きのように泣いた。」 Carlson and Bordes. (1994:22)

(H) ‘Au i ke kai mehe manu ala.

渡る～を <定> 海 ～のように+<不定> 鳥 <遠称>

「鳥のように海を渡る」 Pukui (1983:28)

上記例文(14)(S)において、サモア語では、<pei ‘o+不定冠詞+名詞>という構造の慣用表現で表している。タヒチ語では<前置詞 mai+定冠詞 e+名詞+遠称>という構造の慣用句で表している。ハワイ語の比喩表現の mehe については、Pukui and Elbert (1982:245)が前置詞 me と不定冠詞 he の合体形と述べている。従って mehe を分解すると、<前置詞 me+不定冠詞 he+名詞+遠称>のように、実質的に、タヒチ語のそれと類似した構造と考えられる。タヒチ語の ra とハワイ語の ala はいずれも、「その/あの」のような意味を表す<遠称>の指示詞の一種である。

タヒチ語とハワイ語の慣用表現はいずれも<前置詞+冠詞+名詞+遠称>と類似した構造を持つにもかかわらず、タヒチ語では不定冠詞ではなく定冠詞が用いられる点でハワイ語と異なっている。これについては、3.2. 節で述べたのと同様に、定冠詞 te の総称的用法によるものとも考えられる。定冠詞 te の総称的用法(「～というもの」)と考えると、例えば、例(14)(T)は「子供の嘆きというもののよう」と解釈できる。

また、サモア語の例文(14)(S)では不定冠詞が用いられていたが、同じ慣用表現で定冠詞が用いられる場合もある。

(15)(S) ‘Ua pa le tala i le fasiga o le Aitu, e pei ‘o le

<完了>爆発する<定>ニュース～に <定> 殺害 ～の<定>化け物 ～のように<定>

sosolo o le afi i le vao magumagu...

広がり～の <定> 火 ～に <定> 森 乾いた

「化け物の殺害についてのニュースは乾いた森の火の広がりのように爆発(的に拡散)した。」 Henry (1980:127)

上記例文(15)(S)では、定冠詞がついた森の火の広がり le sosolo o le afi は、あくまでも乾燥し

た森で火事が広がる位のスピードでという意味の比喻として用いられているが、特定の山火事を指しているのではなく、不特定の山火事を指している。例文(3)(S)と同様に、意味的には<不定>の名詞句を表すのに、不定冠詞の代用として定冠詞を用いている事例と考えられる。ここにも、意味的には<不定>の名詞句について不定冠詞に代わって定冠詞が用いられるというサモア語の傾向が表れている。

4. 結び

4.1. まとめ

ここで、前章で示した様々な表現において、意味的に<不定>の事物を表す名詞句がどのように現れていたか表にまとめる。

A は B である (属性(B)を表す述語名詞句の構造)	サモア語 平叙文	前置詞'o + 定冠詞 + 名詞
	疑問文等	前置詞'o + 不定冠詞 + 名詞
	タヒチ語	不定冠詞 + 名詞
	ハワイ語	
A は B でない (属性(B)を表す述語名詞句の構造)	サモア語	(時制 + 否定辞) + 前置詞'o + 不定冠詞 + 名詞
	タヒチ語	(否定辞 + 主語名詞句) + 前置詞 i + 定冠詞 + 名詞
	ハワイ語	(否定辞 + 主語名詞句) + 不定冠詞 + 名詞
A がある	サモア語 平叙文	存在動詞 + 定冠詞 + 名詞
	疑問文等	存在動詞 + 不定冠詞 + 名詞
	タヒチ語	存在動詞 + 定冠詞 + 名詞
	ハワイ語	存在動詞 + 不定冠詞 + 名詞
A が一つもない	サモア語	否定の存在動詞 + 不定冠詞 + 名詞
	タヒチ語	否定辞 + 不定冠詞 + 名詞
	ハワイ語	(融合形) [否定辞 - 不定冠詞] + 名詞
A が B を持っている	サモア語 平叙文	存在動詞 + (A)所有形 (定) + (B)名詞
	疑問文等	存在動詞 + (A)所有形 (不定) + (B)名詞
	タヒチ語	不定冠詞 + (B)名詞 + (A)所有形
	ハワイ語	
A のように	サモア語	動詞「~のようだ」 + 前置詞'o + 不定冠詞 + 名詞
	タヒチ語	前置詞 mai + 定冠詞 + 名詞
	ハワイ語	(融合形) [前置詞 me - 不定冠詞] + 名詞

表 1 <不定>の名詞句の現れ方

今回調査の対象とした表現については、ハワイ語では一貫して意味的に<不定>の事物を表す名詞句には不定冠詞が付されていた。タヒチ語では、「A は B でない」、「A がある」、「A のように」において、意味的に<不定>の事物を表すにもかかわらず、不定冠詞ではなく定冠詞が用いられていた。また、サモア語においては、平叙文においては、意味的に<不定>の事物を表す場合でも、不定冠詞ではなく定冠詞が用いられていたが、疑問文などにおいては不定冠詞が用いられていた。

4.2. 二つの機能的統合

これまで見てきた、不定冠詞の現れ方の違いについて、1) 元々 *paradigmatic* な関係にある二つの語の機能の一つの形式への統合、2) 元々 *syntagmatic* な関係にある二つの語の機能の一つの形式への統合、という二つの統合を用いて説明を試みる。

3.1. 節でも述べたように、今回扱った三つの言語いずれについても、名詞が述語を形成する場合には、前置詞が付加されるのが大原則である。「A は B (という属性を持つグループの一員) です」という意味を表す表現において、サモア語では例文(3)(S)が示すように、原則通り、<前置詞+定冠詞+名詞>で述語名詞句を形成している、しかしながら、タヒチ語とハワイ語においては、例文(3)(T)と(3)(H)が示すように前置詞を伴わずに、<不定冠詞+名詞>だけで述語名詞句を形成している。これはサモア語と異なっていると同時に、タヒチ語とハワイ語の文構造の中でも例外的なものである。このようなサモア語とタヒチ語・ハワイ語との間の差異と、前置詞なしで<不定冠詞+名詞>だけで名詞述語を形成するというタヒチ語・ハワイ語の中でも例外的な構造の存在については、以下のように説明することができる。

タヒチ語においては、元々は、<名詞述語を形成する前置詞'o+不定冠詞 e+名詞>のように横に並んでいたものとする。そこで、前置詞'o のもつ名詞述語形成の機能が不定冠詞 e に統合され、現在は、e という一つの形式で、名詞述語を形成する前置詞と不定冠詞の機能を併せ持つことになったとして説明できる。ハワイ語においても同様である。元々は、<名詞述語を形成する前置詞'o+不定冠詞 he+名詞>のように並んでいた所で、前置詞'o のもつ名詞述語形成の機能が不定冠詞 he の中に統合され、現在、he という一つの形式で名詞述語を形成する前置詞と不定冠詞の機能を併せ持つことになったとして説明できる。<前置詞+冠詞+名詞>として名詞述語句を形成し *syntagmatic* な関係にあった中の二つの語の機能が一つの形式に統合されたということである⁷。

現在、サモア語の不定冠詞 se が前置詞と頻繁に共起する一方で、タヒチ語の不定冠詞 e 及びハワイ語の不定冠詞 he が前置詞と共起することはない。しかしながら、3.6.節の例文(14)(H)で見たように、ハワイ語には、前置詞 me と不定冠詞 he の合体形 mehe という形式が存在する。この合体形 mehe はかつてハワイ語においても前置詞と不定冠詞が共起していたことの名残と考えられる。

syntagmatic な関係にあった二つの語の機能の統合のほかの例としては、いずれもハワイ語であるが、例文(11)(H)で用いられた「A が一つもない」という意味を表す'a'ohe と例文(14)(H)で用いられた mehe がある。'a'ohe については Elbert and Pukui(1979:157)が否定辞'a'ole と不

定冠詞 *he* が融合した形式と述べている。タヒチ語の例文(11)(T)のように、ハワイ語でも、元々は<否定辞+不定冠詞+名詞>のように横に並んでいて、syntagmatic な関係にあった否定辞 ‘*a’ole* と不定冠詞 *he* の機能が ‘*a’ohe* という一つの形式に統合されたとして説明できる。また、比喩表現の *mehe* については、Pukui and Elbert (1982:245)が前置詞 *me* と不定冠詞 *he* の合体形と述べている。これも、元々、<前置詞+不定冠詞+名詞+遠称>のように横に並んでいて、syntagmatic な関係にあった前置詞+不定冠詞の二つの要素の機能が合体形 *mehe* の中に統合されたとして説明できる。

元々 paradigmatic な関係にあった二つの語の機能の統合の例としては、定冠詞の機能の拡大があげられる。同じ冠詞類に属する定冠詞と不定冠詞は、どれかを選択して冠詞というポジションに用いるという paradigmatic な関係にある。サモア語においては、もともと、不定冠詞が持っていた機能のうち、平叙文における述語名詞句についての<不定>の表示の機能が定冠詞 *le* の中に統合されたと考えることができる。タヒチ語においても、「A がある」(存在文)において不定冠詞ではなく定冠詞が使われている点については、サモア語と同様のことが言える⁸。

4.3. 課題

今回は、コピュラ文、存在文、所有文など、意味的に名詞が文の最も重要な情報を担う表現についてのみ扱った。不定冠詞の導く名詞句は、この他に、一般的な動詞の項としても現れる。一般的な動詞の項として現れる場合については別途分析が必要である。

また、不定冠詞は数詞の前にも付加されることがあるが、今回は扱わなかった。言語によって、そもそも数詞自体をどう扱うべきか異なるため、数詞に付加される不定冠詞については、数詞の分析の中で扱う必要がある。

謝辞

* 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) 25370455「ポリネシア諸語における様々な小辞の機能・用法に見られる差異について」の一環である。また、貴重なコメントを下された二名の査読者の方にこの場を借りて感謝申し上げたい。

注

- ¹ 今回取り上げる三つの言語の正書法はローマンアルファベットを用いる。基本的にローマ字読みであるが、母音の前に見られる記号 ‘ は正門閉鎖音を表す。また、サモア語において用いられる *g* は閉鎖音ではなく鼻音[ŋ]を表す。
- ² 冠詞は通常は *ka* であるが、後ろに来る母音の種類等により、*ke* という形が用いられる場合がある。
- ³ 例文(1)(T)と(1)(H)で示したように、ハワイ語とタヒチ語においても、<定>の名詞句が述語になる場合には名詞述語を形成する前置詞 ‘*o* が用いられる。例文(1)(T)と(1)(H)では「ジョン」という明らかに対象が特定される<定>の名詞(固有名詞)が述語となっている。それに対して、不定冠詞が導く名詞句が名詞

述語を形成する場合には前置詞が付加されることはない。ハワイ語の *he* の分析詳細については Shionoya(2009)を参照。また、前置詞‘*o*’以外の前置詞が名詞述語を形成することもある。以下にタヒチ語とハワイ語の例を提示する。いずれも、起点を表す前置詞 *mai* が述語名詞句を形成している。

(T) *Mai te fare mai au.*

~から<定> 家 <方向> 私

「私は家から（来た）。」 Lazard and Peltzer (2000:42)

(H) *Mai ka pō mai ka ‘oiā‘i‘o.*

~から<定> 夜 <方向><定> 真実

「真実は夜から（来る）。」 Pukui (1983:225)

- 4 塩谷(2015)において、ハワイ語のコピュラ文及びコピュラ文の変種の構造を概説している。同定の文、属性の文、所有の文、強調構文等、機能も構造も異なる様々なコピュラ文及びその変種の中で、名詞述語がいきなり不定冠詞で始まっているのは、属性のコピュラ文のみである。
- 5 サモア語の時制・アスペクト指標 *e* は一般的な事実を述べる時に動詞の前似付加される。
- 6 *aia* はここでは動詞の一種として分析するが、ほかの動詞と違い、時制・アスペクト指標が前に付加されないという点で、制限がある。
- 7 ハワイ語については Shionoya(2009)でこのような分析をしているが、タヒチ語も同様の分析が可能であると考えられる。尚、ここで述べる統合とは、二つの要素の機能的な統合を指す。たまたま、ハワイ語の *mehe* と‘*a‘ohe* は機能的にも形態的にも二つの要素が統合していると考えられる事例であったが、タヒチ語の *e* とハワイ語の *he* については、機能的に統合された一方の要素である前置詞‘*o*’の痕跡が現在の形式から確認できないことから、形態的な統合は伴わずに前置詞‘*o*’の機能だけが隣接していた不定冠詞に統合された結果と考えられる。
- 8 タヒチ語では、「A は B（という属性を持つグループの一員）でない」、「A のように」においても不定冠詞ではなく定冠詞が使われているが、これらについては、3.2.節及び 3.6.節で述べたように、定冠詞 *te* の総称的用法によるものとして説明される。

参考文献

- Académie tahitienne. (1986) *Grammaire de la langue tahitienne*. Papeete : Académie tahitienne.
- Carlson, Danièle and Heipua Bordes. (1994) *Te remu 'ura*. Papeete : Association Pererau.
- Carter, Gregory L. (1996) *The Hawaiian copula verbs he, 'o, and i*, PhD dissertation, University of Hawaii.
- Cuneo, Taema. (2010) *Tini, te i 'a i herehere ia Hina*. Pirae: Editions Vahine.
- Davies, John. (1851) *A Tahitian and English dictionary*. Reprinted version. New York: AMS Pr.
- Elbert, Samuel H. and Mary K. Pukui. (1979). *Hawaiian grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Fornander, Abraham. (1916-1917) *Fornander collection of Hawaiian antiquities and folk-lore* vol. IV, Honolulu: Bishop Museum Press.
- FPSSC. (2007) *Final Report*. The Future Political Status Study Commission of American Samoa.
- Henry, Fred. (1980) *Talafaasolopito o Samoa*, Apia: Commercial Printers.
- Hunkin, Galumalemana A. (2009) *Gagana Sāmoa*, revised edition. Honolulu: University of Hawai'i Press.

- Krämer, Augustin. (1994) *The Samoa Islands*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Larkin, Fanaafi M. (1966) *O le aiga o Sione*. Apia: School Publications Division, Department of Education.
- Lazard, Gilbert and Louise Peltzer. (2000) *Structure de la langue tahitienne*. Paris: Peeters.
- Manu-Tahi, Charles Teriiteanuanua. (1998) *Te parau o Papenoo, e peho no Tahiti*. Papeete: Les Éditions Veia Rai.
- Manu-Tahi, Charles Teriiteanuanua. (2005) *Te parau o te mau vāhi faufaa o te mau tupuna i Moorea*. Papeete: Les Éditions Veia Rai.
- Moyle, Richard. (1981) *Fagogo*. Auckland: Auckland University Press.
- Nakuina, Moses K. (1902) *Pakaa a me Kuapakaa*. Reprinted version. Honolulu : Kalamakū Press.
- Perez, Maryel. (2004). *E tem au tamarii... Quelques énoncés pour enseigner en tahitien*. Papeete : Ministère de l'Éducation et de la culture.
- Pukui, Mary K. (1983) *‘Ōlelo no ‘eau*. Honolulu : Bishop Museum Press.
- Pukui, Mary K. and Laura C. S. Green. (1995) *Folktales of Hawai‘i*. Honolulu : Bishop Museum Press.
- Pukui, Mary K. and Samuel H. Elbert. (1986). *Hawaiian Dictionary*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Saura, Bruno and Hiriata Millaud, (2001) *La lignée royale des Tama-toa de Ra‘iatea*. Papeete : Ministère de la culture de Polynésie française,
- Shionoya, Toru. (2009) Hawaiian *he* as a prenominal / preverbal particle. *Language and linguistics in Oceania*, vol.1 1-12.
- 塩谷亨. (2015) 「ハワイ語のコピュラ文」『日本語学』 vol.34-13 52-61.
- Steubel, C and Bro. Herman. (1987) *Tala o le Vavau*. Auckland: Polynesian Press.
- Tavita, Levi and Vavaō Fetui. (2012) *Lau amata: Leo upu and uiga*. Auckland: Evalem Bmks and Educational Rmouce.

執筆者紹介

氏名：塩谷亨

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp